

日本語教育を通して世界を豊かに！

異文化コミュニケーション学部・研究科の日本語教員養成が目指すもの

前日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部長
池田 伸子

○池田 時間がおしておりますので、私のところでギュッと、スケジュールを元に戻して（笑）、という気持ちでお話をしたいと思います。私からは、今回は日本語教育センターではなくて、教員養成プログラムを実施している異文化コミュニケーション学部、それから研究科の日本語教員養成の代表者という立場でお話をしたいと思います。【スライド③-1】

まず皆さんにお話ししたいのは、異文化コミュニケーション学部の中に、日本語教員養成を置いた意味です。異文化コミュニケーション学部・研究科は、「世界を豊かにする」ということをコアにできています。学部を外から見ると、外国語であるとか、留学であるとか、そういうところが、学部の特色として前面に出てしまっていますが、その本質、中心にあるのは、「世界を豊かにする人材を育成する」ということであり、それが学部教育の第一の目標になっています。ですので、そのような学部の視点の中で、日本語教員養成をどういう風に位置付けているかということをお話したいと思います。

異文化コミュニケーション学部で学生に投げかけている質問に、「与えられた世界で物事を考えていないか？」というものがあります。これは、今の若い人に限らず、私たちもそうなりがちなんですけれども、自分の置かれている環境だとか、自分がこれまで受けてきた教育であるとか、自分の身の回りのもの、自分の周りで見えるもの、手に入るものの中で、どうすればいいのとか、どういうことができるのかと考えてしまっていないか、つまり、限られた世界の中で物事を考えてはいないかという問いかけです。学部・研究科としては、入ってきた学生にはまず、そのような考え方を止めてほしいと思っています。自分の与えられた世界の中だけで物事を考えるという癖は一度捨てよう、ということを学部として

は、発信しています。

それから、もう一つ、学部から学生に伝えようとしていることがあります。「社会をどうしたいのか、ということを中心に自分に問いかける、そういう生き方を探せ」ということです。このメッセージはなかなか学生にはうまく伝わらないんですけども、なんかちまっと勉強して、するっと卒業して、就職して、というような人生ではなくて、自分はちっちゃい存在かもしれないけれども、自分なりに社会をどうしたいのかということを考えて、そのために自分は今何ができるのかを考えながら生きていく、そういう人間になってほしいと学生には常々考えています。

「言葉や文化の壁を越えて」という特色は、異文化コミュニケーション学部の特色としてよく認知されていることだと思うのですが、言語や文化の壁を超えて、社会そして世界を変えようとしていく、世界を豊かにしていく、そういうことのできる人材を育成するというのが、異文化コミュニケーション学部の目的なんです。**【スライド③-2】**

そして、本題の日本語教員養成をどうしてこのような学部の中に置いたのかということですが、私たちは日本語を教えるということを通して、それができる、つまり、小さいかもしれないけれども世界を豊かにしていくということが日本語教育を通してできるのではないかと考えているからです。また、そういうことができる人材、できる日本語教師を育成したいという風に考えています。これから異文化コミュニケーション学部の教員養成の概要についてお話ししますが、恐らく他の大学、あるいは、専門学校なんかの日本語教員養成プログラムの科目と比べると、違う点とがかなりあるのではないかと思います。が、そこには、これからお話しするような狙いがあるようになってお考えいただければと思います。

まず、異文化コミュニケーション学部、それから研究科を通しての日本語教員養成プログラムのコアになっている部分が、上の段に書いてあるものです。左側に書いてあるものが、学部の中で絶対に履修しなければいけない科目になっています。これ、ちょっとご覧になると、科目数としては非常に少ないと思います。単位として考えても、2、4、6、8、10、14。まあ、18、16、そのくらいの単位数で、必修部分が固められています。通常、他の大学の日本語教員養成プログラムですと、もっと多い。例えば日本語の歴史であったりとか、それからもっと

教育研究方法だったり、あるいは語彙とか文法とかっていうのが、その大学によって特色はありますけれども、科目として具体的に散りばめられていて、そういうものをきちんと履修して、日本語教員養成プログラムとなっています。でも、異文化コミュニケーション学部の日本語教員養成プログラムのコアは、本当にコアの部分だけ、日本語の仕組み、それから教授法、それから、実習。そして、自分で選んだテーマについて一年、今後は一年半ですけれども、かけて日本語教育に関連するテーマで研究を続けていって結果をまとめるという一連の流れ、それがコアになっています。その後、大学院に進むと、これもまた日本語という言葉が全く出てきません。言語教育学特論、それから演習。それから言語科学特殊研究、修士論文という形で、「日本語教育」という名前が表に出ないまま、日本語教育のことについて扱っていきます。

このように、大学院科目の名称として「日本語」を特に出していないのは、異文化コミュニケーション学部は、他の言語教育に興味のある学生を排除してはいけないと考えているからです。英語であっても、日本語であってもフランス語であっても中国語であっても、外国語としてその言語を教えるということには共通する部分があるはずです。そこで、異文化コミュニケーション学部なりの研究の方法であったりとか、研究の視点であったり、切り方だったりということ、この科目の中で扱っていきこうということから、こういう風になっています。

異文化コミュニケーション学部の日本語教員養成プログラムの特徴としては、左下に赤で囲んである部分が、学部のプログラム、カリキュラムの特徴になっています。学部は、異文化コミュニケーション、それから言語教育、それから国際開発・国際協力、それから通訳翻訳というような、大まかな領域に分かれています。異文化コミュニケーション学部は一学科ですので、学生は横断的に好きな科目を履修することができています。それから、英語に加えてもう一つの言語を必ず必修として学ぶことを義務付けています。それに加えて海外留学、これも必修化しています。このようなカリキュラムを通して、私たちの学部で育つ日本語教員に何を求めているかということ、まず日本語以外に二つの言語について知っているということ。多くの言語についての知識を持つことによって、日本語が特別な言語だという意識を捨てて頂く、つまり、日本語も世界に数多く存在する言語の中の一つの言語なのであって、それぞれの言語が、それぞれの言語の価値、それから難しさ、それから易しさというものを持っているのだ、というような考え方

を身につけてもらいたい、ということです。

それから、海外に必ず行ってもらいたいということ。自分と異なる文化の中に身を置いて、そこで生活するという経験を通して、自分が外国人であるという感覚を必ず経験してほしいと思っています。日本で日本語を学習している人々は、自分の母語とは異なる「日本語」を日本という「外国」で勉強しているわけです。そんな学習者の気持ちがどのようなものであるのか、必ず自分自身で経験してほしいと思っています。

それから、異文化コミュニケーション関連の科目であったり、国際開発・国際協力関連の科目を通してそれらの知識やスキルを身につけることで、いわゆる狭い意味での外国語教育ドストライクの日本語教員ではなくて、自分の興味をもった分野の中で、日本語教育は何ができるのかということを考える人材、そういう日本語教員を育てたいと思っています。国際協力にも、国際開発にも異文化コミュニケーションにも、通訳翻訳にも、日本語という言語を教えることは、関わってきます。これからグローバル化していく社会の中で、みんながそれぞれの考え方で日本語教育を武器にして活躍していける現場は数多くあるはずで、それを自分で探していける人材、探していける日本語教員を育成したいと思っています。

そして、そのための仕掛けとも言えるかもしれないものが右下になりまして、今日ここにも来てくれていますが、異文化コミュニケーション学部では、地域連携の一つとして、日本語教室というのをやっています。これは、日本語教育に関心のある学部生と日本語教育を専攻している大学院生が中心になって、池袋で働いたり住んだりしている外国人の方に、ボランティアとして週2回日本語を教えるという活動です。おかげさまで学習者も順調に増えてきており、今、現場は少しピキピキしている（笑）、増えてきた学習者をどうしようか、どう学習者に満足してもらえるような学びの場を提供しようか、という壁に今がちなっている最中ですが、真剣にみんなで知恵を出し合って、一年以上続けてきています。日本語教育の教員養成プログラムを取っている学生以外の学生も、この活動には加わってくれていますので、こういう活動を通して日本語教育に興味を持つ学生が増えたり、あるいは、日本語教育の可能性について学生が認知してくれるようになればいいなという風に考えています。

それから、先ほども出しましたが、スロベニアのリュブリアナ大学とは協定を結んでいて、大学院生であれば一年間、現地の大学で日本語教師として教え

させてもらえることになっています。これは、履歴書に教育経験として書き込めるので、修士を修了した後、日本語教員として就職を考える際には非常に有利だと思っています。一期生として野尻さんはつい最近帰ってきましたけれども、本当に良かったという風に言っていて、三浦さんは次期リュブリアナ派遣生として、これから準備をしていただくということになっています。【スライド③-3】

それから、今日お集まりいただいている立教日本語教育実践学会、できたばかりの学会ですけれども、学会の目的の一つは、大学院生を育てるということでもあります。大きな学会ですと、なかなか大学院生が発表したり、論文を掲載してもらえたりというチャンスは少ないんですけども、そういうチャンスをどんどん広げていって、立教卒の日本語教員を、業界の中にどんどん増やしていきたいと思っています。つまり、異文化コミュニケーション学部の日本語教員養成は、いわゆる日本語学科であるとか、外国語学部であるとか、そういうところにある日本語教員養成プログラムとは違って、日本語教育以外、日本語学以外の経験であるとか、知識であるとか、考え方、行動力、そういったものを身に着けた日本語教員というものを送り出したい、という目的でデザインされているということになりますね。

○丸山 ありがとうございます。それでは続きまして「中級日本語」ご担当の先生がたにご登壇いただきます。

【スライド③-1】

日本語教育を通して世界を豊かに！

異文化コミュニケーション学部・研究科の日本語教員養成が目指すもの

立教大学
異文化コミュニケーション学部
池田伸子
2014.9.17

【スライド③-2】

異文化コミュニケーション学部

与えられた世界で、物事を考えていないか？？

社会をどうしたいか...を問う生き方を探そう！

言葉、文化の壁を越えて、世界を豊かにしよう！

日本語を教えることでそれができる...と 信じよう！

【スライド③-3】

日本語教員養成プログラム

日本語学概論 A, B
日本語学特論
日本語教授法 1, 2
日本語教育実習
卒業研究

異文化コミュニケーション
英語+1
海外留学研修
国際開発・国際協力

言語教育学特論
言語教育学演習
言語科学特集研究
修士論文

日本語教室
リュブリャナ大学留学
立教日本語教育実践学会